

県政報告

百瀬智之

ももせ ともゆき

Green City No.3

～ 高校再編 ～

- 1983年2月4日生まれ
- 穂高幼稚園卒園
- 山形小学校卒業
- 鉢盛中学校卒業
- 松本深志高校卒業
- 中学校・高校はサッカー部
- 中央大学法学部法律学科卒業
- 上智大学法科大学院修了
- 元学習塾経営
- 衆議院議員を歴任

県政報告 テーマ ① 迫る高校再編

今春、長野県教育委員会から県立高校の「再編・整備計画（3次）案」が公表されました。少子化に伴い検討が進められていたものであり、すでに公表された第1、2次案を含め計画通りとなれば、78校ある県立高校は2030年3月末までに64校に集約されます。松本地域では、**塩尻志学館高校と田川高校を再編統合して「塩尻総合学科新校（仮称）」**を設置する案と、**南安曇農業高校、穂高商業高校、池田工業高校の3校を再編統合して「安曇野総合技術新校（仮称）」**を設置する案が決まりました。

これだけ大規模な高校再編は松本地域の今後を左右するものであり、100年に1度の大事とも言えます。そこで先の議会では、一般質問・委員会審議ともに高校再編をテーマとして知事や教育長らと議論しました。

県政報告 テーマ ② 偏差値主義の弊害

よく「生徒が行きたいと思える学校を」とか「魅力ある学校づくり」という言葉が出てきます。全ての生徒が笑顔で高校生活をおくれるようにと願ってやみませんが、現実を思い浮かべると決して笑顔ばかりではられません。

例えば高校生活を始めるための大関門たる高校入試。昔から高校入試は、中学校時の成績が上の者から自動的に行ける学校が振り分けられるシステム、いわゆる偏差値主義が基本的に続いています。「将来何をやりたいのか」よりも「どこの高校に行けるのか」に重きが置かれてきました。**とにかく入試は競争なんだから、つべこべ言わずに知識を頭に叩き込んで良いスコアを取りなさい!**という中学校教育が行われてきた結果、高校生活では「今学んでいることは本当に自分がやりたかったことなのか」「自分で決めた道を進めているのか」という不安や葛藤が子どもたちに付きまとい、モヤモヤしているうちに今度は全く同じ構造で大学入試に突撃していくこととなっています。



裏面へ
続く

百瀬智之は積極的に 環境・教育政策に取り組んでいます



県政報告
テーマ

③ 38か国中「37位」

こうしたことの弊害は様々な形で伝えられています。例えば近年の「子供・若者白書」(内閣府)では日本の子どもたちの自己肯定感や自己所有感が先進各国に比べて顕著に低いことが明らかになっています。また子どもの幸福度ははかる直近のユニセフの調査では、**日本の子どもたちは精神的な幸福度が38か国中37位でした。**「自分のことを自分で決められない」「親や教師に全部決められている気がする」そんな思いを子どもたちにさせてしまっているとしたら、学校教育にもその一因があると言わざるを得ません。

高校のあり方や入試制度にメスを入れると同時に、本来は小中学校の教育もセットで見直さねばなりません。小中学校のうちから、いやもっと早く保育園・幼稚園の時期から知識だけでなく色々な経験や体験を子どもたちに提供して子どもたちの好奇心とやる気を育てていくことではじめて、「あれをやってみたい」「これを学んでみたい」と、自分の進路を真剣に考えられるようになると思うからです。松本地域には様々な分野でそれらを提供できる恵まれた環境が整っています。



県政報告
テーマ

④ 農業高校がなくなる

ではそれらを前提に、子どもたちの好奇心ややる気に正面から応えられるような、今後求められる高校とはどのような学校でしょうか。「子どもの数が減ってきたから近隣の小規模校を集めて総合学校にします」では議論が拙速に過ぎます。例えば今回再編の対象となった南安曇農業高校、穂高商業高校、池田工業高校。3校はいずれもかつて農学校としての歴史を持ち、農業を志した数々の卒業生を輩出してきました。それが時代の要請とともに姿形をそれぞれに変え、今般総合技術新校となることによって、3校はおろか、**中信地区からはいよいよ「農業」という名前のついた高校が消えることとなります。**

しかし、かねてよりの環境・健康思考の高まりに加え、今年は食糧の安全保障や、度重なる物価上昇で、日々の食がひときわ話題になっています。私たちの食生活と日本の台所を支える農業を、もう一度見直していこう。そんな気運が高まり農業復権が待たれる時代に、足下で肅々と農業高校を整理してしまっているのは一考を要します。



県政報告
テーマ

⑤

全国を見据えたスケール感

林業も目を外せません。松本地域全体で考えた時、**かつて全国に名を誇った木曾山林高校が統合されてしまったことは一大痛恨事**でした。形式的に今の木曾青峰高校に受け継がれているとはいえ、林業にはいま再び光が当てられています。特に長野県は全国に誇るやまほいくを展開し、小中学校でも環境教育が進み、木曾から塩尻、松本にかけては林業大学校や林業総合センター他、民間でも活発な関係団体や事業体が集積し、長野県が掲げる「森林県から林業県へ」を牽引できる力を持っています。

そのような観点から議会では、今後は全国に誇る伝統の木曾山林高校の単独復活も目指すべきだとも申し上げましたが、それには志学館高校と田川高校の統合案に止まらない、大胆な高校改革が必要になってきます。**全国に誇れるような高校を長野県はつくれるのか、生徒が本当に行きたいと思えるような実学が提供されているのか。**いま求められているのは、そうした全県全国を見据えたスケール感ではないでしょうか。



県政報告
テーマ

⑥

教育のトータルデザインを

上記で農林業を例示しましたが、工業や商業においても小さい頃からものづくりやマーケット的感觉に触れ、子どもたちの感性を磨いていくことが必要だと思います。しかし教育に限らず産業全体についてもそうですが、**全てをバランスよくやろうとすると、他の地域に全てにおいてバランスよく負けていく状態**にもなってしまいます。農林業も、工業も、商業も、必ずどこかに先進地があって、そこでは常に選択と集中の論理で当該分野の教育にも投資している現場を数々見てきました。

松本地域はどの産業を伸ばそうとしていて、子どもたちと一緒にどのような地域をつくらうとしているのか。今はそうした地域と教育のトータルデザインが欠落している時代であり、**私としては農林業を軸にもう一度地域と教育を立て直すべき時期**にきていると訴えています。高校再編が子どもたちに本物の教育機会を提供するための一つのきっかけになるよう、今後も訴えを続けていきます。



街頭でも
県政報告
しています!

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

